



橋寺 知子

専門とする分野：

近代建築史

所属：

関西大学 環境都市工学部 建築学科

経歴：

1988年 関西大学 卒業

1993年 関西大学大学院 修了

1993年 4月

関西大学

団地再編のイメージ

私がいわゆる「団地」に持つイメージは、5階建ての板状住宅が平行に並ぶ風景である。ステレオタイプなイメージで申し訳ないが、小さい頃、友達や親戚の家を訪ね、クルクルと階段を上がり、覗き窓の付いた鉄の扉の前に建ち、チャイムを鳴らす、小さい頃の思い出には欠かせない一つの原風景である。そして、今の私にとって、1960・70年代の団地は、近現代建築史上、大事な所産の一つと位置づけられる。

戦前、1930年代から、ヨーロッパでは市民のために公共的な集合住宅が計画され、さまざまな試みが実践された。ベルリンのブルーノ・タウトによる集合住宅、ロッテルダムデルラーヘによる集合住宅などは近代建築史では欠かせない事例で、これらはモダニズムでありながら、手仕事の部分もあり、先進性と親和性の両面を合わせもつ。戦後では、ル・コルビュジェのユニテ・ダビタシオンが、近代建築史上の集合住宅の代表例であろう。1棟に小さな都市をパッキングしたようなコンセプトだが、これは「団地」のイメージではないように思える。第2次世界大戦後、多くの国で復興が進められ、大量の住宅供給が必要となった。「作品」ではない、モダニズムの理論に基づく、ごく普通の住宅団地が、世界中で広く供給されたのが戦後である。

戦前の集合住宅のアイデアが、戦争という中断を経て、戦後のさまざまな大型集合住宅団地が出現することになったと言えるだろう。日本では、戦災で多くの住宅が失われたが、恒久的な住宅が建設可能になったのは1950年代後半以降である。早く大量に供給するには、「工業化」が不可欠だった。技術的にも工業的に部材を生産すると同時に合理的な一貫した工法で建設できるようになったのは、60年代以降である。戦前からのモダニストたちの合理的思考のコンセプトとそれを実現する技術の発達、そして社会的なニーズが合わさって、「団地」が出来上がったのだ。

ニーズに対する答え方は難しい。ニーズにストレートに答えるなら、大量の住宅を早く経済的に合理的に建設することを目指し、具体的には住戸の型は限定し、工場で作った部材はできるだけ種類を少なくして合理的に、外観よりも、必要な設備の充実などに心を砕くことになる。その結果は、画一的で無味乾燥、長大で特色に乏しい団地という評価を受けることにもなる。一方で、コンセプトは同じでも、敷地の地形を生かしたり、部材を工業化するにあたって細かな所へ配慮した団地計画もある。多くの団地は建設後50年に満たないが、それぞれの歴史的背景や特徴を明らかにし、その評価をしていく時期にさしかかっている、と思う。ヨーロッパ諸国では、戦後の住宅地も文化財として指定されている。

これからの「団地再編」にあたっては、そういった団地の歴史的評価も合わせて考えるべきだと思っている。想像力を働かせれば、伝統的な町並みがイメージされる伝建地区や文化的景観に選定されている地区と、戦後作られた団地は同等の意味をもつ。違いは、団地はかなり若くて古さの価値はなく、工業化の時代であり、「手仕事」の跡が見えない点である。だが、それが時代の表現であり、それに応じた評価をすべきだ。関わったプランナーたちは、それぞれに工夫を凝らした。その時代、そこで考えられたことを整理しておくことが必要である。住民や周囲の人々が、住まう場所のことを知り、愛着を持つことがなければ、いい住環境はできない。単調な団地と見えても、それが生成された経緯や意味を知れば、違った風景に見える。特徴と価値を理解した上で、何を、どう変えるのか、保つべきもの、新しく加えるものは何なのかを考えることが必要だ。

団地再編に関する知見

ヨーロッパ、特にフィンランド、スウェーデンにおける戦後の集合住宅団地の保存・再生に関する事例を研究する。

フィンランドは20世紀、すなわち真にモダニズムの国であり、団地も含めたモダニズムの所産は文化史的に重要な意味を持つ。首都ヘルシンキには多くの重要なモダニズム建築があると同時に、近年、積極的に大規模な再開発が進められ、街の様子は大きく変わりつつある。保存と開発は対立するものではなく、都市計画上、建築や街の特徴と価値が論じられ、開発と同時に保存内容も検討される。

スウェーデンは、第2次世界大戦では直接的な戦災を被らなかったが、戦後の人口増加・住宅不足に対応するべく、ミリオン・ホームズ・プログラムと呼ぶ10年で100万戸を供給する計画を実施した。意欲的な計画もあったが、その規模の大きさから、巨大な郊外住宅団地を生み、建設当初から様々な問題を抱えた地区もあった。対策は絶えず施されてきたが、近年、この政策および、それによって生成された集合住宅団地の状況および今あるいはこれから必要になる再開発を考える研究が多く見られる。北欧諸国の団地は、客観的に見てよく考えられて実施した計画が多く、建て替えのような、抜本的な再開発しか選択肢がないというようなものは少ない。課題はもちろんあるが、その地域に何らかの価値を発見し、それは残しながら、魅力を増す何か新しいものを挿入し、刺激を与えるような再開発が多く見られる。その手順や戦後建築の評価方法をさらに探していきたい。

「ケーススタディ 1960年代の郊外住宅団地ピヒラヤマキ ―技術の歴史的評価、コンクリートパネル外壁材の修理のガイドラインおよび1960年代の色彩復元のためのガイドライン」、Riitta Salastie・橋寺知子、DOCOMOMO Japan、DOCOMOMO Japan 技術専門委員会研究発表論文集、pp.99-102、2008年5月

2011年1月以降の業績（発表論文・著書など）

「Ikoma Building: The Modern Architectural Gem of the Semba District in Osaka」、Tomoko Hashitera、Science and Technology Reports of Kansai University、No.53、pp.47-53、2011年3月

「副読本 吹田の文化遺産」(DVD)、黒田一充、橋寺知子、藤井裕之、高橋隆博、大谷渡、櫻木潤、藤岡真衣、常行貞臣、速水裕子、関西大学大阪都市遺産研究センター、2011年3月

「再読関西近代建築―モダンエイジの建築遺産― 25 大阪中央郵便局」、橋寺知子、日本建築協会、建築と社会、第92巻第1069号、33-40ページ、2011年4月

「生駒時計店所蔵の建築図面資料について」、橋寺知子、関西大学大阪都市遺産研究センター、大阪都市遺産研究、第1号、1-11ページ、2011年6月

「再読関西近代建築―モダンエイジの建築遺産― 30 大阪倶楽部」、橋寺知子、日本建築協会、建築と社会、第92巻第1074号、29-32ページ、2011年9月

「昭和初期の大阪日赤支部病院 ―東洋一のモダン病院の誕生―」、橋寺知子、関西大学大阪都市遺産研究センター、青春と戦争の惨禍 ―大阪日赤と救護看護婦 研究報告集、13-24ページ、2011年9月

『関西大学 戦略的研究基盤 団地再編 プロフィールシート』

執筆：橋寺知子

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
先端科学技術推進機4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線:6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>